

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 西山 雄二
論文題目 異議申し立てとしての文学
—モーリス・ブランショにおける孤独、友愛、共同性—
論文審査委員 鵜飼 哲教授、恒川 邦夫教授、森本 敦生准教授

1 本論文の構成

本論文はフランスの作家・批評家モーリス・ブランショ（1907-2003）の作品を、批評作品と政治的著作を軸に全体的に考察し、高い抽象度をそなえ一見現実を超絶しているかにみえる彼の文学思想が、両大戦間期、第二次世界大戦、アルジェリア戦争、六八年五月と続く歴史の激動をつらぬいて形成された独自の政治思想と厳密な連関において成立した事情を解明しようとするものである。

本論文は次の各章から構成される。

前書き 誰？— モーリス・ブランショとは

第一部 孤独

- 1 文学の存在論 - 本質的孤独
- 2 言語と否定性
- 3 死と死ぬことの間隙
- 4 <中性的なもの>、この余分な語
- 5 「すべてが消え去った」の現れ—文学空間の可塑性
 - 1) 非人称性 2) 無際限さ 3) 可塑性
- 6 書き手と読み手の対話
- 7 異議申し立ての力としての文学

第二部 友愛

第一章 バタイユにおける遺棄された者の共犯的友愛

- 1 バタイユにおける共犯的友愛
- 2 ニーチェからみた古代ギリシアの友愛
 - 1) 所有欲 2) 類縁性
- 3 「星の友愛」— 友愛と敵対の等根源的な連関
- 4 バタイユにおける絶対的に遺棄された者の友愛
- 5 同類者たちの交流と遺棄される者の孤独の交錯

第二章 異議申し立ての原理-共同体の不可能性という試練

- 1 権威への異議申し立て
- 2 措定的ならざる肯定-ミシェル・フーコーの指摘
- 3 証人としての読者への友愛
- 4 人間と獣のあいだの友愛
- 5 ブランシヨに寄せるバタイユの友愛
 - 距離のある友愛と距離のある共犯の感情
- 6 病床のバタイユに寄せるブランシヨの友愛 - 非人称的な不幸

第三章 未知なる者への相互性なき友愛-ブランシヨによるバタイユ追悼文

- 1 証人なき喪の作業
- 2 全集の死後出版-すべてを語ること
- 3 亡き友への呼びかけ
- 4 友愛の言葉と感官
- 5 秘密の究極的な慎ましさ
- 6 友をもたない未知なる者への友愛

第四章 政治と倫理の分節化の方へ-レヴィナス哲学との対話

- 1 レヴィナス哲学から導き出される「第三種の関係」
- 2 暴力の言葉とエクリチュールの言葉
- 3 <他人>が<私>にもたらす平和と恐怖
- 4 非対称的な関係の二重化
 - <中性的なもの>に応答する責任としての友愛

第五章 強制収容所の経験から残余する友愛と抵抗-アンテルムの収容所文学

- 1 ブランシヨにとってのユダヤ人大虐殺
- 2 非人称的な不幸における破壊しえないもの
- 3 峻厳たる希望-強制収容所の事実から維持される友愛
- 4 共同の要求の出発点-すべてを語ること

第三部 共同性

第一章 文学と革命の等根源的な力

-三〇年代以降のブランシヨにおける「革命」のモチーフ

- 1 必然的な精神革命の希求
- 2 フランスという虚無をめぐる国民的革命の呼びかけ
- 3 分派の要請
- 4 革命から文学へ

第二章 拒絶と権利-アルジェリア戦争に抵抗する宣言の非人称的な力

- 1 拒絶
- 2 独裁者と文学者
- 3 無関心の権威による本質的倒錯
- 4 逃走の運動と迂回の言葉

5 市民的不服従-権利と宣言

- 1) 複数の名による無名の共同性
- 2) 不服従の権利
- 3) 決断を下す宣言の力

第三章「明日、〈五月〉があった、破壊と構築のための無限の力が」

1 contestation-異議申し立ての季節〈六八年五月〉

2 アルジェリア戦争終結から〈六八年五月〉へ

3 「政治の死」- ド・ゴールという敵

4 エクリチュールの共産主義^{コミュニズム}

- 1) 文学という無限の異議申し立ての力
 - 2) 持続なき共産主義の運動
 - 3) 学生-作家行動委員会
 - 4) 文学的共産主義の諸原理
- ① 無名性 ② 断片性 ③ 共同性

5 〈五月〉の出来事-すべてを語ること

結び

主要参考文献

2 本論文の概要

本論文はモーリス・ブランショの文学思想と政治思想の接点を探求するために、「孤独」「友愛」「共同性」という三つの観点を設定する。これらはそれぞれ、一人称単数、二人称、一人称複数という人称構造に対応するが、「共同性」には二者関係に還元されない第三者＝三人称のための場所も開かれており、三人称は匿名かつ任意の「誰か」でもありうる限りで非人称的性質をも帯びうるものである。

第一部ではブランショの文学理論の諸相が検討される。ブランショによれば文学は作家から作者としてのその権能を剥奪し、文学作品は作者から隔絶してその「本質的孤独」において成立する。このような事態は対象をその不在において示す言語の本質に由来するものであり、そのとき出現するのは事物の現前からも言葉の観念化作用からも逃れ去る〈中性的なもの〉である。著者は40年代のブランショが一方ではヘーゲルに依拠しつつこのような言語の本質のうちに死の作用を見出し、他方ではハイデガーが『存在と時間』で主張した「死へ向かう存在」の本来性を批判して、人間がその死の瞬間に「私が死ぬ」という能力を喪失し「誰でもないひとが死ぬ」という〈中性的なもの〉に晒されると考えるにいたった事情をたどる。そして、このようにして発見された〈中性的なもの〉が非人称的なものの世界に通じている限りで、この〈中性的なもの〉を目指す運動としての文学は異議申し立ての力たりうるとする。

第二部では、ブランショがジョルジュ・バタイユ、エマニュエル・レヴィナス、ロベール・ア

ンテルムという三人の作家・哲学者の友との思想的交流を通じて、彼固有の「友愛」の思想を形成していく過程が検討される。バタイユはニーチェの友愛論を踏まえながら独特の友愛論を展開し、供犠のさなかに参加者が供犠対象の恍惚状態に巻き込まれる事態を「共犯的友愛」と呼ぶ。それは自己と他者とがともにその自己性を放棄することで発見される「類似性」の交換によって生じる交流の所産である。一方ブランショが「友愛」を積極的に論じるようになるのは、バタイユの死後に執筆された追悼文「友愛」以後のことである。友が病床にあること、さらには死去することは、ブランショにとって、友愛の経験に本質的な、けっして踏み越えられない距離を明確にする点で、友愛を深化させこそすれ不可能にするものではない。著者はブランショが、友のうちに「第二の自己」を見ようとし二者間の相互性を不可欠の要素とみなす西洋の伝統的な友愛概念からはっきり訣別していることを強調し、見知らぬ者と相互性を欠いたまま結ばれうる点に、ブランショにおける友愛の思想の独創性があるとする。

ブランショはまた、1960年代以降、ストラスブール大学時代の友人レヴィナスの他者性の哲学との対話を深め、言語を通じた他者との関係を探求する。レヴィナスが他者との非対称的關係に倫理的なものとしての第一義性を認めるのに対し、ブランショは他者を超越的審級とは考えず、自己と他者の双方から二重化される非対称的關係を「異他性」として提示する。著者はここに、<私>でも他者でもないものとしての<中性的なもの>の運動を認め、二人称的世界としての「友愛」のうちにも、ブランショにおいては、このような形で非人称的なものが浸透していることを指摘する。

また、アンテルムはアウシュヴィッツ収容所の生き残りであり、その体験を綴った『人類』の作者である。ブランショはこの作品でアンテルムが収容所における人間性の破壊の果てに見出した「破壊不可能なもの」に注目し、友愛はこの地点においてこそ見出され、困難な形で維持されるべきものであると考える。著者は、この破壊不可能な人間の残余こそブランショにとっては非人称的なものにほかならず、そこに彼が、抵抗の、また異議申し立ての力を感得していたとする。

第三部では主としてブランショの政治的著作が扱われ、この孤高の文学者の生の軌跡、思考の営みを歴史的展望のなかでたどりなおすことを通して、彼が追求した「共同性」が多面的に検討される。

1930年代に青年ブランショは、右翼系の雑誌や新聞に、フランスの議会制民主主義の退廃を弾劾し、非順応主義的で根源的な精神革命を唱える評論を多数執筆していた。彼の主張は時代の危機の深化とともに急進化し、「テロリズム」への訴えを発するにいたる。その後政治時評から身を引いたのち、ブランショは革命の本質を文学のなかに見出すのである。

1950年代後半のアルジェリア戦争期から六八年五月までは、ブランショがもっとも深く政治に関与した時期であるが、それはまた、五八年に政界に復帰し第五共和制の大統領として君臨したド・ゴールの権力に反対する「文学者」としての異議申し立てでもあった。著者はブランショのド・ゴールに対する激しい反発が、この政治家の権力構造がある非人称性に支えられており、その意味で彼自身の文学理論の悪しきパロディとみなされえたためであるとする。一方ブランショはアルジェリア戦争に反対し、兵役拒否の権利を擁護した「百二十一人宣言」を起草して、署名を通じつつも匿名の拒絶の力を解き放ちうるような運動の発明を目指す。そして六八年五月に

は、街路での不特定の人々の自由な意見表明の氾濫に非人称的な「文学空間」の発露を見出し、「学生作家行動委員会」を組織して、断片的テキストの集団的構成を通じた匿名の「共同性」、「エクリチュールの共産主義」の創出を試みた。著者はここに、非人称的なものに固有な異議申し立ての力によって、公共空間に〈誰のものでもない〉位相を開こうとしたブランシヨの政治思想のひとつの到達点を見る。

以上の検討と分析を踏まえ、著者は、ブランシヨの思想における「消失の運動」を強調するこれまで支配的な作家観を転換する必要を主張し、非人称性を起点として「孤独」「友愛」「共同性」という多層的な人称世界を産出した点こそが、彼の文学思想、政治思想の本領であると結論する。

3 本論文の成果と問題点

本論文の成果は、まず第一に、ブランシヨの文学思想と政治思想の接点を、彼の文学者としての経歴の全期間にわたって詳細に検討し、「孤独」「友愛」「共同性」という三つの観点を人称的に規定しつつブランシヨ独自の〈中性的なもの〉〈非人称的なもの〉との関係を系統的に問うという方法によって説得力豊かに描出した点にある。このことによって、「顔のない」孤高の作家という従来のブランシヨ像は大きな転換を迫られることになるであろう。

第二に、ブランシヨが思想的交流をもった作家、思想家たち、バタイユ、レヴィナス、アンテルムらとの思想的な異同が的確に指摘され、ブランシヨ固有の思考の輪郭がそのことによって非常に明確に浮き彫りにされた点である。とりわけブランシヨの難解な友愛思想のモチーフが、バタイユ、レヴィナスとの対比を通して一点、一点明らかにされていく部分は重厚であり、ブランシヨのテキストに対する著者の深い知識と、西洋思想史に関する広い知識が有効に生かされていたと評価できる。

第三に、ブランシヨ没後に出版された政治論集や評伝など近年の研究成果を踏まえ、歴史的展望のうちで彼の思想を問う作業を大胆に展開した点である。本論文の文体はこうした歴史的背景の記述とブランシヨのテキストの内在的読解の間の適切な均衡の上に成立しており、両大戦間期、第二次世界大戦、アルジェリア戦争、六八年五月という政治的時代の思想的文脈を背景として、ブランシヨの思想の固有性を浮かび上がらせることに成功している。この点で、学術論文としてのみならず、一個の文学的著述として大変読み応えのあるものである。

とはいえ、本論文にもいくつかの問題点は存在する。

第一に、ブランシヨの批評作品および政治的著作にコーパスが限定され、文学作品がほとんど扱われなかった点である。とりわけブランシヨの友愛思想にとって本質的な忘却のモチーフなどは、文学作品との対比によって、いっそう厚みをもった分析が可能となったのではないだろうか。

第二に、論文全体の論旨の整合性を気にかけるあまり、原文に即した検討がややおろそかになったところがないわけではない。とりわけブランシヨとレヴィナスを対比した部分では、言語の弁証法的暴力性の指摘に過度の力点が置かれる反面、レヴィナスによる口頭言語の特権化のうち

にブランショが見てとった「曖昧さ」は見落とされている。また、ブランショが友愛を贈与や約束と峻別する件が引用されながら、この判断の根拠についての主題的な検討がなく、他の箇所ではブランショの政治的実践が贈与論のタームで論じられることもあるなど、記述に若干の乱れが散見される。このような点から、扱われたテキスト群が豊かなものであるだけに、本論文で論じ尽くされなかった論点も少なくないであろうことが感じられる。

第三に、思想史的背景を記述する件では、哲学的な議論の枠組みがやや過度に図式化され、そのことが論の運びに対する疑念を惹起する場合がある。背景的文脈の提示と主要な論述対象の分析の間で記述に疎密ができることには致し方ない面もあってはいえ、たとえばハイデガーの真理観を原文を引いて根拠を示すことなく視覚モデルと断定するなどの部分についてはやはり再考が必要であろう。

しかし、これらの問題点は、本論文が全体として達成した成果にくらべれば瑕瑾に類するものであり、その価値を大きく損なうものではない。本論文が、著者の今後の活躍をおおいに期待させてくれるすぐれたものであることには変わりはない。

以上の判断のうえに、審査員一同は、本論文が独創的かつ優秀であることを認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えている。